

朝日新聞 25面 (地域面) 平成26年12月19日 (金)



「見沼田んぼ」で稲刈り体験をする小学生ら。10月、さいたま市見沼区、プロジェクト推進委員会提供

選ばれたのは、NPO法人や教育機関など20団体でつくる「未来遺産・見沼田んぼプロジェクト推進委員会」の活動。親子で参加できる見沼田んぼでの米作り体験や清掃ボランティア、保全調査など、1991年ごろからそれぞれの団体が活動を続けてきたが、2011年4月、各団体が協力して自然を残してい

田んぼの風景が広がる「見沼田んぼ」の自然や文化を守る市民の取り組みが18日、日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」IIに登録された。関係者は「これを機に見沼の自然保全活動に興味を持って参加してくれる人が増えれば」と期待する。

見沼田んぼ保全活動「未来遺産」に 「自然守ろう」団結評価

「活動に興味、広がって」

こうと委員会を立ち上げた。会員数は約1400人。昨年度、延べ2万人以上の親子らが各団体の活動に参加したという。このほか、市民講座やシンポジウムを開くなど保全活動の幅を広げている。

活動対象の見沼田んぼは、さいたま市と川口市にまたがる南北約14キロ、東西約5キロの地域で、約2千軒ある。江戸時代中期に開発され、見沼代用水を掘って利根川から水を引いた。1990年代ごろから、近接する大宮や浦和などの都市化が進むなかで見沼の自然が注目されはじめた。県は見沼の治水機能のほかに環境保全も重視し、95年に農地転用抑制など土地利用を制限する基本方針を策定した。今回、同委員会の活動が4回目の申請で登録に至った。同連盟の担当者は「個々の活動も素晴らしいが、大都市圏にある自然を守ろうという一つの目標に向かって一致団結する活動は他の地域の団体のモデルにもなる」と評価。同委員会の新井一裕委員長(80)は「ネットワークの拡大を図り、県民に広く普及PRしていきたい」と意気込む。(河原夏季)

プロジェクト未来遺産

日本ユネスコ協会連盟が、100年後の子どもたちへ地域に根ざした文化や自然を残そうと活動している団体を応援し、2009年からプロジェクトを登録している。全国から毎年20〜40件の応募がある。昨年度までの登録は年10件、今年から3件になった。これまでに熊谷市に生息する淡水魚ムサシトミヨを保護する活動など52件のプロジェクトが登録されている。県内では2例目。